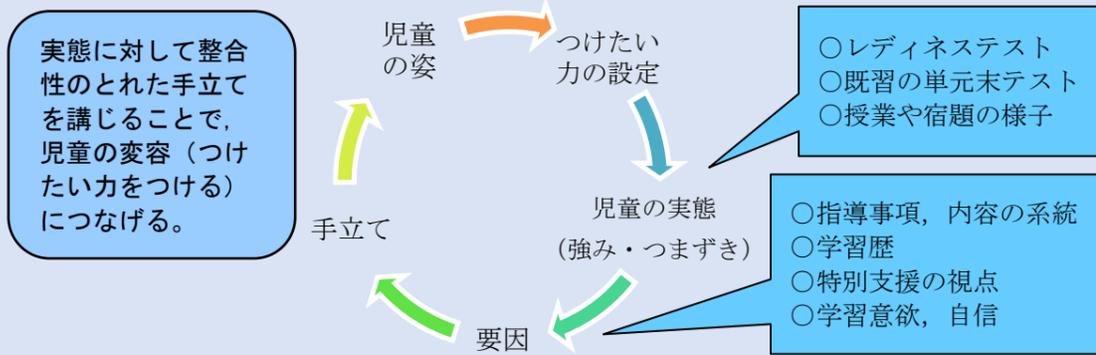


## 1 つまづきに着目した授業改善5つのポイント

### ① つまづきの要因分析サイクル



上図の「つまづきの要因分析サイクル」に従って、児童の実態や要因分析を教職員全体で行う事が重要。単元でねらう目標(つけたい力)に沿った実態の把握とその要因分析を基に、克服のための手立てを導き出す。これら一連の分析の整合性が取組の成否を分ける。

### ② 強みを生かす

実態把握においては、系統性や学習歴の特徴などからつまづきを見つけ出すことは重要であるが、その一方で、児童の強み(特性や興味関心・得意な学び方)を生かし支援していくことも、児童の学びを支える大きな力となる。

### ③ 学び方・学習の自己調整力を育成する(自由進度学習)

自由進度学習とは、予め準備された教材を用いて、児童が自分なりのペースや向かい方で主体的・自立的に学び進める学習方法である。本校では、自由進度学習に取り組むことで、学び方や自己調整力が育ち、主体的な学びの育成に繋がると考え、取り組んでいる。案外、学び方が身についておらず、取組の見通しに困っている児童が多い。

### ④ UDの視点・特別支援の視点の活用

学習内容の本質を見極め、ねらいや活動を絞る「焦点化」、論理やイメージを見える化する「視覚化」、一人一人の学びを広げみんなのものにする「共有化」等、ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくりや、ワーキングメモリの観点から言葉とイメージのマッチングを図る等の特別支援教育の視点を取り入れた学習方法の工夫は、大いに役立つと感じている。

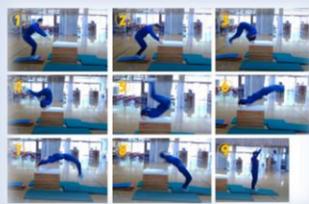
### ⑤ 学習環境づくり

実物や体験、掲示資料等、学習環境は児童の好奇心を刺激し、学習や活動を誘発してくれる。恐るべしである!

#### 3年算数科「あまりのあるわり算」

「余りが小さい方が勝ちカードバトル」の場を学習環境として設定し、余りの数の勝負をするゲームとして楽しんでわり算の計算ができるようにする。

#### 4年体育科「器械運動(マット・跳び箱運動)」



ICT環境を整える。指導者の見本を録画し、いつでも確認できるようにする。また、タブレットで自分の練習の様子を録画し、ふり返ったり、技のコマ送りの掲示シートと見比べたりしながら、ポイントアドバイスをあえるようにする。

ICT環境を整える。指導者の見本を録画し、いつでも確認できるようにする。また、タブレットで自分の練習の様子を録画し、ふり返ったり、技のコマ送りの掲示シートと見比べたりしながら、ポイントアドバイスをあえるようにする。

## 2 効果のあった事例

### 3年算数科「ミニ発表会のならび方をていあんしよう!(あまりのあるわり算)」

#### ○つまづきについて

- ・20÷4になる問題作りにおいて、かけ算になる問題を作るなど、わり算の意味理解が不十分である。→どのような場合にわり算を使うのかや包含除と等分除のちがいが分からないため。
- ・35÷4=8あまり3の、8や3の単位が分からない。→問題文から場面をイメージすることが苦手であり、数とのマッチングができていないため。

#### ○手立て1について(②強みを生かす)

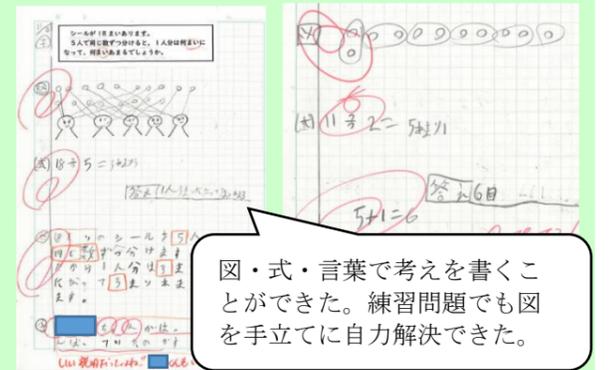
- ・文章問題を対象児童が好きな魚に関する問題や3年生の自分たちが長いすに座るとしたら...等の文脈にし、問題場面が具体的にイメージしやすくなるように工夫する。
- ・絵や図を描くことが得意であるため、丸図をかくことを問題場面把握の際の手立てとし、立式やその意味、単位を考えるための足場とさせる。

#### ○手立て2について(④UDの視点・特別支援の視点)

- ・前時との処理の仕方の違い(本時は、商と余りではなく、みんなが座るためのいすの脚数が問われていること)が焦点化できるよう、仮の問題を出した後、改めて題意の分かる問題文を提示する。
- ・余りを切り上げて処理する授業では、問題文を提示しながら、一列目だけ丸図をかき、問題場面を捉えさせるとともに、自力解決の際に、この提示した丸図の続きをかいて考えるよう助言する。

#### ○個の変容について

- ・文章問題では、文を読んで場面を正しく理解することが難しく、問題文には何が書かれているか、何を聞かれているのかを理解しないまま、問題にある数字を頼りに思い込みで解くこともあった児童だが、図をかくことが意味理解や計算の手立てになると実感できたようで、図を自分の考えの根拠にして、授業で何度も発表することができた。練習問題でも、「全部のボールを運ぶから、もう1回たす」と意味を理解して自力解決できた。
- ・テストでも余りを切り上げるのか切り捨てるのかを自分で判断し、解決できた。(知識・技能85点、思考85点)



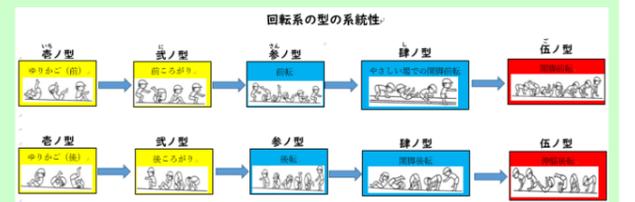
### 4年体育科「習得せよ! マット・跳び箱の呼吸 壱ノ型!!(器械運動 マット・跳び箱運動)」

#### ○つまづきについて

- ・マット運動や跳び箱運動を32%の児童が苦手と感じている。→恐怖心で挑戦することが難しかったり、人前で披露することに抵抗感があったりするため。
- ・与えられた方法で練習することはできるが、自分から考えて必要な練習方法を選んだり、工夫したりすることに課題がある。→技の習得のために何をすればよいか分からないかったり、教師や友達の演技からポイントとなる点を見付けられなかったりするため。

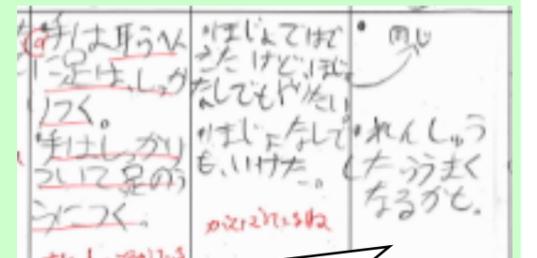
#### ○手立てについて(③学び方・学習の自己調整力を育成する(自由進度学習))

- ・児童の好きな「鬼滅の刃」を取り入れ、基本の技に取り組む「炭治郎コース」、発展技に取り組む「柱コース」など、児童が楽しみながらも本質的な学びができるよう単元を構想する。
- ・技の系統性表を作成し、児童と共有する。それにより、見通しを持って、課題を選択(「前転ができるようになるには、ゆりかごから練習しよう」等)し、学習の自己調整をしていくことができるようにする。



#### ○個の変容について

- ・本人が思う存分にできる自由進度学習の強みが生かされ、自分が納得いくまでとことん同じ技を練習する姿が見られた。2分間に7回も技を練習するなど運動量も増加した。
- ・1学期にマット運動を行った際、上手くできないことに加え、それを見られてしまうのも嫌で、練習に参加できなかった児童が、最初から最後まであきらめずに学習することができた。一人で練習し、できる!と自信が出てきたところで友達と共有し始めた。



「手は耳らへんにつく」「ほじょなしでもやりたい」「れんしゅうしたらうまくなるかも」等、技のポイントや意欲を書いている。